



アイランドを知るための五冊

吉本 美佳

「遠い西の果てのエメラルドの国」、「妖精と出会えるケルトの国」、もしくは「伝統音楽とギネスビールの国」など、昨今のアイランドはそのイメージ戦略に成功し、観光客は年々増加している。そんなアイランドとは、実際どのような国なのだろうか。明確なのは、その答えは一文で表現できるものではないということだ。幸運なことに、私はアイランドの演劇や文学について講義や演習をとおして他者へ伝える機会がある。私がアイランドという国について語るとき、注意していることが三つある。

- ① 政治と宗教と芸術の結びつきを意識する。
- ② 美化・理想化しない。
- ③ 感傷的にならない。

注意をしても、徹底しているかどうかは自信がない。特に②と③については、無意識のうちにしてしまう傾向があると自覚している。この三つの注意事項に関して少し説明を加えると、①については、アイランドという国の成り立ち、特に近代からの歴史は、政治と宗教と芸術の関係なしで知ることができないと考える。アイランドや政治とあまり関連付けられることのないオスカー・ワイルドでさえ、その文化と政治の深い結びつきに言及し、自らの芸術性が政治的にならないためにアイランドからロンドンへと移住したと述べている¹。ワイルドがどこま

で真実を述べているかは疑わしいが、常に政治と宗教と芸術のうちいずれかを単体で捉えないように気をつけることは重要だろう。

②について、多くの劇作家や作家、詩人を生み出したこの国の演劇を研究する日本人としては、無意識のうちにこの国を理想化してしまう。W・B・イエイツ、G・B・シヨ、サミュエル・ベケット、そしてシエイマス・ヒーニーという四人のノーベル文学賞受賞者だけでなく、ジェイムズ・ジョイス、オスカー・ワイルド、ブライアン・フリール、遡れば、ジョンサン・スウィフトやブラム・ストーカーを生み出した国である。しかし少しでもそのような目でこの国を見始めると、途端にナシヨナリズムや妖精の存在する国というこの国のロマンチックなイメージの提唱者になりかねない。イエイツが無意識ながら仕掛けた畏にはまってしまうのだ。

③の「感傷的にならない」は、国の規模とその被植民国としての歴史から、この国を被害者化してしまい、同情的な目で見てしまうためである。これも②と同様に危険であり、特に政治的な問題を扱う時にはステレオタイプな加害者・被害者分けを導いてしまう可能性がある。

この三点に注意して話しても、私がこの国の歴史と文化と芸術に魅了され続けているという事実は伝わるのだろうか。そんなこの国の力が伝えられればという思いで次の五冊を選んだ。豊富な文学作品はあえて避

け、今回選んだ著書により、アイルランドという国家や文化、国民について知るきっかけづくりができればという願いで選んだつもりである。

- ① 榎本伸明著『アイルランド紀行 ジョイスからU2まで』中公新書、二〇一六年
- ② 杉山寿美子著『アベイ・シアター1904-2004』研究社、二〇〇四年
- ③ ジェイムズ・ジョイス著 柳瀬尚紀訳『ダブリナーズ』新潮文庫、二〇〇九年
- ④ Finian O'Toole and others, *Modern Ireland in 100 Artworks*, (Dublin: Royal Irish Academy/The Irish Times, 2016).
- ⑤ Terry Eagleton, *The Truth about the Irish*, (Dublin: New Island Books, 1999), テリー・イーグルトン著、小林章夫訳『とびきり可笑しなアイルランド百科』筑摩書房、二〇〇二年

榎本伸明著『アイルランド紀行 ジョイスからU2まで』中公新書、二〇一六年

まずは読みやすく、アイルランドに馴染みが無くとも興味を持って読み終えられるものとして本書をおすすめしたい。

「紀行」という書名どおり、著者が実際に訪れたアイルランドの土地を取り上げられ、その地と関連した文学作品や芸術創作物、映画や音楽などがアイルランドの歴史や社会と結び付けて語られている。内容の主旨はその土地や著者の旅行記ではなく、その土地にちなんだ作品から見えるアイルランドである。

あとがきで著者が、「さまざまな土地と書物をめぐる、道草だらけのアイルランド紀行」と述べるように、アイルランド各地にまつわる話は、すぐにその土地に関係づけられた作品についての話と移り、さらにその作品の背景へと話が進む。これを「道草」と称するならば、かなり有意義な道草だ。軽妙な文体で語られるアイルランドの社会や歴史は、ほんの触り程度に止められるが、アイルランドを知るために欠かせない事象

を確実に含んでいる。著者は各章において、旅の全容を語らない。読者を彼の道草へと誘い、引き込んで、その場に興味を持たせるところで、退散するかのように章が終えられる。どの章も、もう少し知りたいと思わせるところで終わっているのだ。それはそこから読者自身の足で道草をすすめるように促しているかのようだ。

本書における著者のごく短い旅の様子からは、著者自身が各地で得た実体験と文学者としての知が読みとれる。例えば、オズカー・ワイルドについて書かれた章では、ダブリンのメリオン・スクエアにあるワイルド像を紹介し、その公園にあるワイルド像の台座に刻まれた文句を著者が散歩途中で書き留めたエピソードが述べられる。そしてそのメモを頼りにそれぞれの文句の出典を探し、原文を和訳した上でワイルドという人物について解説する。著者の榎本伸明は文学者であり、ジョン・ミリントン・シングの『アラン島』(二〇〇五)や、映画化され、日本では二〇一六年に公開されたコラム・トビーンの『ブルックリン』(二〇一二)の翻訳者でもある。本書の中で作品を解説する際に必ず記される絶妙な和訳も必見である。

本書で取り上げられている作品や人物の多様性は、アイルランドの芸術文化を表現しているようだ。また、書名として選ばれているアーティストが、ジェイムズ・ジョイスとロック・バンドU2であることから、著者のアイルランドに対する見方が読み取れる。

杉山寿美子著『アベイ・シアター1904-2004』研究社、二〇〇四年
アイルランドの国立劇場、アビー劇場 (The Abbey Theatre) は、日本では一般的に「アベイ座」と呼ばれている。本書のタイトルも「アベイ」とカタカナ化されているが、ごくわずかながら「アビー劇場」と訳される例を見つけたので、本来の発音に少しでも近い「アビー」とここでは記したい。

上述したように、アイルランドを知るには、その国の政治と宗教と芸術の結びつきを知る必要がある。そして芸術の中でも演劇、そしてこの

国の国立劇場であるアビー劇場の成り立ちは、アイルランド国家が自国のアイデンティティーを確立する過程と深く結びついている。それは時代だけでなくイデオロギー的な観点から、この劇場の設立の維持の過程が、アイルランドの国家独立までの動きと重なるからだ。

本書が扱う時代は、書名では劇場創設年の一九〇四年と記されているが、実際には一八九二年にダグラス・ハイドにより設立されたゲール語同盟の活動当時にまで遡っている。そこから文芸復興運動の始りを経て、一八九七年七月にイエイツとグレゴリー夫人ことイザベラ・オーガスタ・グレゴリーが劇場建設の構想を思いついた日、そして劇場設立から劇場の創立一〇〇周年となる二〇〇四年までの歴史が本書では網羅されている。

アビー劇場は一九〇四年、国家の独立への気運が高まる時代に創設された。アイルランド独自の芸術を確立する場としてのこの劇場の目的は、当時の時代精神と重なっていた。そもそも一八九一年にイエイツにより始められた文芸運動、アイルランド文学協会が一八九九年アイルランド文学座として演劇運動となり、目指したものは、イングランドにはない種の演劇であった。さらに国立劇場の設立へと実を結ぶとき、ダブリンの商業劇場からの異議による制約もあり、「ゲール語、又は英語で、アイルランドを題材に、アイルランド人によって書かれた劇、もしくは高度な演劇芸術の分野で、大衆の興味を引く外国の著者による演劇作品のみ」を上演する場となった。単に理想を追い求める芸術ではなく、文学では届かなかった文字の読めない庶民に対しても通じる芸術としての演劇の可能性に、創設者らの思いがかけられていた。確固たる理想のもとで設立されたこの劇場は、時には観客による暴動の場となり、一九一六年のリースター蜂起や、対イギリス戦、そして内戦と、激動する国の情勢により幾度も運営危機に遭いながら維持され続けている。その様子が、この劇場に関わる人物らの詳細と共に本書では伝えられている。

イエイツやグレゴリー夫人のこの劇場にかけた思い、エドワード・マーティンやジョージ・ムーア、そしてシングなど、この劇場の運営に関わった人々について、彼らの残した作品からは想像し得ない人間ドラマ

をこの劇場の創設と維持の過程と共に本書は描き出している。シングの『西の国のプレイボーイ』上演時に起きた暴動とその後のイエイツの対応、シヨーン・オケーシーの『鋤と星』の上演時に起きた暴動、イエイツとグレゴリー夫人の理想のもとで志を断念しそうになる作家たちなど、劇場での上演と同等のドラマが舞台の外でも起こっていたことがわかる。

本書でも言及されている通説として、アビー劇場は「国家を映し出す鏡」としての役割を果たしてきた。この意味を知るためにも、本書で言及されている劇作品も併せて読んでもらいたい。本書が解説する上演当時のエピソードを知ることにより、この国立劇場で上演を許可された作品を内容からだけでなく、背景も含めて楽しむことができるはずだ。いかに各作品がアイルランドという国をステージ上に乗せているのか、上演当時の社会背景を考慮すると上演の意味の解釈が可能となるはずだ。

アビー劇場は幾度も財政難に直面しながら、創設者の思いを受け継ぐ劇場関係者によって現在も質の高い舞台を上演している。この劇場での上演は、ほとんどの作品が演劇という表現媒体を大切に、舞台だからこそ可能なものを見せている。そしてこの劇場は、演劇教育、作家の育成、そしてアーカイブの利用など、常にだれもが利用できる場として演劇を広めている。設立時にイエイツらが目指した国立劇場のあり方を堅持しようと努める人々によりこの劇場の質が維持されているのだ。そのあり方の維持についての重要性を本書は着実に伝えている。

アイルランドに行く機会があれば、ぜひともこのアビー劇場を訪れてもらいたい。本書を読んだ後であれば、公演だけでなくこの劇場自体も楽しむことができるはずだ。劇場内に飾られている劇場創設における主要人物らの肖像画だけでなく、この劇場自体がその歴史を物語っている。

ジェイムズ・ジョイス著、柳瀬尚紀訳『ダブリンズ』新潮文庫、二〇〇九年

James Joyce, *Dubliners*, (Ware: Wordsworth Editions), 1993.

文学作品に目を向けると、その膨大な数の名作のため選択に迷ってし

まうのだが、やはりアイルランドを知るための本として、また読み易い本として一冊だけ入れておきたい。

本書はダブリンの町と人々を描く十五編の物語からなる短編集である。最後の物語、「死者たち」を除いては、どれも短い物語で、その中にごくありふれた人々が描かれる。それでいて読者に与える情景の強さや感情のゆさぶりとといった文字の力を有している。私が大学一年生だったその昔、比較的平易な英語で書かれたこの本さえも読解するのに必死だった英語力で一編一編を読んだ。当時、アイルランドについては「紛争問題のある国」程度の認識しかなかった私が、初めてその国に触れた気持ちになった作品でもある。なんとか英文を読みすすめていくと次第にダブリンの町の情景が思い浮び、結末の何とも突き放されたような感覚を経験することで英文で読書する喜びを初めて覚えた。

特に「アラビー」では、夕暮れのダブリンの町で憧れの女性に話しかけられた少年の戸惑い、アラビア市場に行きたいのに、そのことをすっかり忘れた叔父の帰宅を待つ少年の苛立ち、そしてついにたどり着いた閉まりかけの市場の殺伐とした光景とアラビアという名の差など、ゆっくりと物語の世界に入り込み、主人公の少年に感情移入したところまでどり着いた結末で、一気に突き放される気持ちになった。そんな結末にある、作者からの冷酷な裏切りが、私に人間という存在について考えさせた。

どの物語からもダブリンの町の様子が伝わる一方で、その人々の心情の描写から作者の冷めた人間描写を感じる。一九一四年に本書が出版された当時、アイルランド国内は独立への気運が高まっていた。そのような国の状態からはかけ離れた、普通の人々の生活が本書の中では描かれる。本書から感じるダブリンの町は狭く薄暗い。人々は美化も醜化もされずに描写される。作者はそこから常に一定の距離を保ち、冷やかにその町と人々を見ている。そこから見えるのは、人間の弱さや、脆さ、愚かさや迷いといった普遍的な人間性である。

本書は英語で読むことをお勧めしたいが、数種類の翻訳本も出版され

ている。いくつかの翻訳を読み比べるのもまた楽しいだろう。

Fintan O'Toole and others, *Modern Ireland in 100 Artworks*, (Dublin: Royal Irish Academy/The Irish Times, 2016).

「現代のアイルランドを一〇〇の芸術で象徴することは可能か?」という序章での問いかけから始まる本書は、アイルランドの主要新聞アイリッシュ・タイムズ紙と同国の学術機関であるロイヤル・アイルランド・アカデミー (RIA) による共同企画の成果である。監修者のフィントン・オトゥールをはじめとするパネルメンバーにより、一九一六年から二〇一五年までの一〇〇年間の芸術作品(書籍、絵画、彫刻、演劇、詩、建築)から各年を象徴するのにふさわしい作品が一つずつ選ばれ紹介されている。アイリッシュ・タイムズ紙で連載した記事を書籍化したのが本書であり、同紙のホームページでも閲覧することができる。各作品についての文章は短く、あまり難しくはないが、本書に掲載されている作品の美しい写真を見ていくだけでも十分に楽しめる。

演劇に精通しているオトゥールが監修者であることもあり、アイルランド現代演劇を象徴する重要な演劇作品、劇作家が網羅されている。また、芸術作品としては製作されていなかった国営航空会社、エアリングスの時刻表(本書の表紙絵にもなっている)やダブリン市内から地方都市への長距離バス用発着所 (Busaras) まじ、幅広い作品が掲載され、選出された理由が記されている。

他方で、大衆文化の欠落は否めない。この点はアイリッシュ・イグザミネー紙のデス・ブリーンが「象牙の塔っぽさがある」と評するように、映画やロック、ポップ・ミュージック、大衆小説はこの一〇〇の作品の中に入れられていない。二〇一三年に同じ監修者と企画者のもと *A History of Ireland in 100 Objects* というアイルランドの歴史を象徴する一〇〇のオブジェクトを紹介する本が出版された。その三年後に本書が出版された経緯から、数年後には一〇〇のポップカルチャーを集めた本が出版されることを期待したい。

本書の監修者でもあるオトゥールは、この企画を経て顕著になったことは、アイルランドの芸術が「葛藤の連続」であったことだと述べる。この一〇〇年間、国家と芸術家の関係は決して支え合うものではなかった。そしてその葛藤こそが、アイルランドの芸術性に生命力を与えるものであり、芸術を作り出すと述べる。

ジャーナリストであるオトゥールの著書もぜひ読んでもらいたい。残念ながら日本語に翻訳されている本はないが、『*The Lie of the Land: Irish Identities* (1998)』や『*The Ex-Isle of Erin* (1997)』など、常にその時代のアイルランド社会を鋭く捉えて分析している。

このような企画と出版が可能であること自体がアイルランドという国を象徴しているようだ。毎年、膨大な数の芸術作品がある中で、各年につき一つの作品を選出できること、その作品がその年を象徴し、外国人である私のような人間でも知っている作品が多いこと、ひとつの分野に偏らず多様性を維持しながら選出できること、そして女性作家やその作品が男性作家と同じぐらいの割合で選出されていることなど、このような選出が可能な国はどれ位あるのだろうか。疑問に感じる。例えば日本では可能なのだろうか。

Terry Eagleton, *The Truth about the Irish*, (Dublin: New Island Books, 1999).

テリー・イーグルトン著、小林章夫訳『とびきり可笑しいアイルランド百科』筑摩書房、二〇〇二年

英語の書名から表記したのは、ぜひとも原書で読んでもらいたいかからだ。翻訳者の責任ではなく、和訳すると伝わりにくい可笑しさが満載されていることと、著者の他の著書と違い、平易な英語と文章で書かれているためだ。著者の師であるレイモンド・ウィリアムズの『キーワード辞典』のように、アルファベット順のキーワードで項目が分けられている体裁からも、本書はかなり読み易い。

著者は『表象のアイルランド』(一九九七)の中で、カトリック教アイル

ランド人の出自を明確にしながら、自らを英国の「左翼知識人」と定義づけている。アイルランド人ではなく、アイルランドの歴史や社会を熟知し、文化論の観点で国を見ることが出来る著者だからこそ記すことが可能だと感じさせる皮肉なつぶりな、それでいてこの国に対する愛着が伝わるアイルランドの捉え方が本書の特徴である。

理想化されたアイルランドやアイルランド人像を崩し、客観視できるようにすることで真のアイルランドを見るように仕向ける。その意味で本書の原文タイトルは最適であり、翻訳本での変更は非常に残念だ。ただし、確かに「とびきり可笑しい」本であり、それはかなり毒気の強い可笑しさでもある。

例えば、「ジェイムズ・ジョイス」の項目では、「アイルランドの主要産業のひとつ」と定義付け、その名がもたらす経済効果として、Tシャツや夏期講座などを挙げる。さらに「神」の項目では、「驚くほど人気のある存在」と称した上で、その人気はU2のボノに次々と説明する。このように終始、毒の強い悪ふざけや皮肉を込めてアイルランドが語られる。読みながら笑みがこぼれ、時には大笑いしてしまう。

軽い文章ながらも、確かな文献から歴史を把握している著者だけに、歴史的事実も確実に含めている。ジョークの中に時折含まれる痛烈な視点は、文化論者としての著者の力を感じる。例えばアイルランドで醸造されるウイスキーについて述べる中、「アイルランド性」について言及し、それは人々を酔わせるものであり、幻や偽りを製造するものであると批判する。それにより、アイルランド伝説の女王メイヴがミッキーマウスに代わり、「ケルト版・ディズニールランド」化すると述べ、意図的に操作される国のアイデンティティーを疑問視する。本書で著者が示している見方こそ、アイルランドを知る上で重要な姿勢なのだろう。

注

(一) Mary Trotter, *Modern Irish Theatre*, (Cambridge: Polity Press, 2008), p. 41.